AMDA
多様性の共存
ジャーナル

2024 年 7 月 25 日　VOL.47　第 310 号
発行／ AMDA　〒 700-0013　岡山市北区伊福町 3-31-1
TEL 086-252-7700　FAX 086-252-7717
E-mail:member@amda.or.jp

2024 年
夏 号
夏

救える命があればどこまでも

特定非営利活動法人アムダ（AMDA）
https://amda.or.jp/
特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構
https://www.amda-minds.org/
特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター
https://www.amdamedicalcenter.com/
AMDA 兵庫　http://amda-hyogo.com/

連載インタビュー「支える喜び」シリーズ　第 40 回
美波町国民健康保険美波病院院長　本田 壮一 先生

AMDA を支えて下さっている方々の様々なエピソードをインタビュー形式でお届けします。今回は、美波町国民健康保険美波病院の本田壮一院長です。　（聞き手：AMDA 大西　彰）

AMDA　これまで美波病院ならびに本田先生とは、AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォームを通じて親睦を深めてきました。AMDA が支援を予定している徳島県美波町の協力医療機関として、県南部圏域や美波町での訓練でご一緒させていただくなど、様々な方面でご支援いただいています。今更ですが、初めて AMDA について知った時、どのような印象を持たれましたか？

本田　そうですね。岡山で発足したことや海外への支援などで、AMDA の名前と菅波茂先生の存在は知っていました。実際に交流が始まったのは、美波町や AMDA の関係者に紹介されたことが大きかったと思います。また、岡山の国際交流センターで行われた『南海トラフ災害対応プラットフォーム調整会議』に何度か参加したことや、プラットフォームの自治体連携統括をされている元消防署長の篠原さんから積極的に紹介していただいた経緯があります。「岡山から美波町までどのくらいの時間で行けるか」といったことを一緒に検証した記憶がありますね。

AMDA　美波町を訪れた際、先生から伺った言葉で印象に残っているのが、「ウェルかめ」です。美波病院で研修を受けた医師たちが美波病院を " 巣立った故郷 " のように大切にしている印象を受けました。

本田　「ウェルかめ」というのは、2009 年 9 月から 2010 年 3 月まで放送された NHK の連続テレビ小説です。視聴率は低かったのですが、美波町にある遍路宿のヒロインが地元の砂浜で懸命に海に向かっていくうみがめの子どもの姿に感動し、その姿に世界へ向かう自分の姿を重ねる、という話です。

単なる学生インターンということではなく、「受け入れた学生や研修医が、また一人前になって美波病院に勤務してくれたらいいな」という " うみがめプロジェクト " のような形を考えています。ただ、現実は厳しく、地域と関連のある人は戻ってくるものの、それも他の病院との人材の奪い合いです。県立病院など、ある程度大きな医療機関に勤務している元研修医が緊急支援で美波病院に戻ってきたケースはありますが、中々うまくいかないのが実情です。

医師不足は厳しいものがあって、常勤が現在私を含めて 2 人。私が 65 歳で、もう 1 人が 67 歳です。徳島県は、人口の割合にしたら全国で一番医師の数が多いのですが、医師の平均年齢の高さも一番になっており、若い人がいない " いびつな構造 " になっています。また、医療機関が遍在しているため、徳島市内、小松島市内には医療人材が多い一方、徳島県西部や南部には少ないのが現状です。

AMDA　先生の「喜び」についてお伺いします。

本田　病院から 600 メートル離れた場所が、私の生まれ育った場所です。高校へも自宅から通いました。大学は徳島市内ですが、関連病院で勤務した後、20 年ほど前に美波町に戻り、旧由岐病院に帰ってきました。地域は高齢化が進んでおり、自分が幼い時にお世話になった方を患者さんとして診るようになりました。そういった方々がすごく自分を頼りにしてくれていることが嬉しいし、やりがいを感じます。* 病院も 8 年前に統合して高台に移り、災害を考えて新築されました。地元の高齢者が大半ですが、皆、災害に対する意識は持っています。非常勤で勤務されていた先生が AMDA の支援活動に参加されて、メキシコや北海道で起きた地震の状況などの報告を受けたこと、また組織的な交流等を持てたことがよかったと思います。

（* 現在の美波病院は、旧日和佐病院と旧由岐病院が統合されて誕生）

2019 年 12 月、AMDA が参加した美波病院での訓練（左）　美波病院全景（右）

「あれから半年」- 能登輪島中学校訪問

2024 年 1 月 1 日午後 4 時 10 分頃、石川県能登半島を震源とする最大震度 7 の地震が発生。2 日朝に調整員 2 名で岡山を出発し、夜、石川県金沢市の県庁に到着しました。

石川県保健医療福祉調整本部の情報を元に、翌 3 日には、七尾市にある公立能登総合病院内の能登医療圏活動拠点本部へ。その後、AMDA 医療チームの登録と打ち合わせを行い、輪島市立輪島病院へ向かいました。

高速道路の通行止め、道路の陥没や隆起、その他悪天候や余震の影響によって大規模な渋滞が起こったため、移動に長時間を要しました。

4 日夜、AMDA と大規模災害時協力協定を結んでいる長野県諏訪中央病院の医療チームと合流。情報共有を行い、輪島市内での活動を開始しました。

7 日夕刻、輪島市立輪島中学校（以下、輪島中学校）を拠点に AMDA が医療支援活動を行うことが決定し、翌日からの活動に備え、避難所内の調査を AMDA、行政、学校長の三者で実施しました。

その約 1 ヶ月後、2 月 3 日には地元の医療機関が保険診療を徐々に再開し、加えて輪島中学校避難所と輪島病院を結ぶ巡回バスが運行再開になるということで、AMDA の活動は診療以外の支援活動に移行することになりました。

活動の初期フェーズが収束することになり、2 月 15 日から 17 日に石川県内でお世話になった各所への報告と挨拶を行い、再度輪島中学校を訪問しました。輪島中学校の生徒は、親元を離れて白山市に集団避難している状況が続いていました。

その後、4 月 24 日から 26 日に再度、輪島中学校を訪れました。中学生の集団避難は解除されて学校に戻ってきていました。近隣小学校の仮設校舎ができるまで小学生が中学校の教室を利用されているような状況でした。地域の復興状況は完全ではありませんが、水道も主要箇所は徐々に復旧が進んでいます。

今後も輪島市を訪問して、支援活動について協議していきたいと思います。

（南海トラフ災害対応プラットフォーム合同対策本部　本部長　大西　彰）

ウクライナ人道支援活動

国連難民高等弁務官事務所によると、2022 年 2 月下旬に勃発したウクライナ人道危機以降、2024 年 6 月時点で 3,290 万人以上のウクライナ市民が周辺国に避難しました。AMDA では人道危機勃発直後の 2022 年 3 月 7 日より多くの方が避難する隣国ハンガリーでニーズ調査を開始。医師、調整員ら延べ 16 人をハンガリーへ派遣し、医療支援活動を行いました。

この活動は 2023 年 3 月 15 日より、1 年間、外務省の日本 NGO 連携無償資金協力事業としても採択され、ウクライナ国内 2 ヶ所の病院（ダイナスティメディカルセンター、セントミッシェル小児総合リハビリセンター）と、ハンガリー国内 2 ヶ所の支援団体（ヴァルダ伝統文化協会、メドスポット）とともに、現地協力団体主導の下、継続して支援を行ってまいりました。

耳鼻咽喉科を専門とするダイナスティメディカルセンターでは、避難者に対して無償での手術や、がん患者に対する抗がん剤の支援を行いました。

セントミッシェル小児総合リハビリセンターでは、常時 200 人近くの子どもたちが通う同センターの光熱費に資金が充てられたほか、近隣の児童福祉施設への食料支援と巡回診療などの医療支援を行いました。

物資支援を中心に行うヴァルダ伝統文化協会では、避難してきた方に対する炊き出しや日用品の配布のほか、国外避難によって農作業をする若者がいなくなってしまった町への食糧支援を行いました。医療団体メドスポットは、多様な専門医で医療チームを結成し、巡回診療を実施。持病のある患者へ血圧計を配布するなど避難者の健康増進へ向けた活動も行いました。

外務省による日本 NGO 無償資金協力事業としての期間は終了しましたが、今後も AMDA では、必要とされる支援を継続して行ってまいります。

（プロジェクトオフィサー　金高　摩耶）

AMDA ハイチ支部：ハイチ国内避難者支援活動

AMDA ハイチ支部は 2024 年 3 月 10 日から 12 日にかけて、ポルトープランス市とデルマ市の 3 ヶ所の避難者キャンプにおいて、合計 468 人に対し、内科と歯科の診察と薬の処方を実施しました。

本活動は、AMDA ハイチ支部が 2023 年 9 月と 10 月に実施した避難者キャンプでの医療支援活動に続くものです。2023 年度の 3 度にわたる医療支援活動を通して、合計 1,670 人に支援を届けることができました。

ハイチでは武力集団による暴力や占領が長期化しており、本活動は多くの人々が居住地を追われている現状を受け、実施されました。2024 年 2 月時点で、首都ポルトープランス市には 600 人から 3,000 人規模の避難者キャンプが 38 ヶ所も存在しており、食糧や水の不足、病気の蔓延がみられました。これまで、AMDA ハイチ支部はフォンデネグレ市で移動式歯科を運営していましたが、今回同市から活動の場所が変更になった理由として、周辺地区の占領により活動の休止を余儀なくされた経緯があります。支援を受けた方や関係者からは、活動の継続を希望する声や、初めて薬の支援を得ることができた喜びの声をいただいています。

（インターン　那須　千花）

アフリカ・スーダン：医療施設を通じた支援

様々な民族・宗教が混在し多様性に富むアフリカ・スーダンでは 20 年以上、紛争が続いていました。一旦は落ち着いたものの 2023 年 4 月、スーダン国軍と民兵組織（RSF）による衝突が発端となり、内戦が 1 年以上続いています。その影響で多くの人は住む場所を失い、日々の生活に困窮しています。

この状況を受け、AMDA はムサ・オマル元駐日スーダン大使を通じて、首都ハルツームにある病院が行う活動に対して資金的支援をしました。この病院は無料で透析を行うほか、内戦による被害の大きかった首都ハルツーム市内 10 ヶ所で、何万人もの住民へ食事を提供しています。さらに、病院内にある『アサイダ（Assayda）女性エンパワーメントセンター』では、女性の能力開発を目指した、子どもの医療ケア、応急処置、手芸、食品加工などの講座が開かれています。この支援に対し、オマル元大使から AMDA の支援者に感謝が寄せられました。

（GPSP 推進戦略局担当部長　岩尾　智子）

AMDA カンボジア支部：脱コロナにより活動再開

AMDA カンボジア支部では、新型コロナウィルス収束に伴い、昨年よりそれまで自粛していた従来の活動を徐々に再開し、少しずつ普段の様子を取り戻しています。

2023 年 8 月に開催されたリプロダクティブヘルスに関する青少年フォーラムでは、梅毒等、最近妊婦の間で増加傾向にある性感染症を取り上げました。識者を招いて行われた会には、およそ 100 人が参加し、カンボジアの若者を取り巻く性行動の現状と課題を踏まえて、講義が行われました。

また大学生を対象としたサッカープログラムも活動を再開。この取り組みは、元々若者が違法薬物使用等の軽犯罪に巻き込まれるのを阻止し、サッカーを通じて青少年の健全な育成を図ることを目的として始まったものです。コロナ期間中は活動を見合わせていましたが、このほどチェンラ大学が中心となり、近隣の大学のチームを交えて、『チェンラ大学サッカー杯』を開催。総勢 10 チームが参加し、親睦を深めました。

これらの活動を通じて、今後、益々若い世代の健全な育成に注力していくことが期待されています。

（AMDA 本部　近持　雄一郎）

インド・ブッダガヤ：AMDA ピースクリニック（APC）の活動（2024 年 4 月、5 月）

妊産婦宅訪問時、妊婦の話を聞く APC スタッフ

マタニティークラス

2009 年に開所した AMDA ピースクリニック（APC）は、2014 年より妊産婦を対象とした母子保健活動を継続して行っています。APC で行う妊産婦健診とマタニティークラス（健康教育・栄養プログラム）に加えて、APC 女性スタッフによる妊産婦宅訪問も行っています。

月 2 回行う妊婦健診に、2024 年 4 月は延べ 40 人、5 月は延べ 69 人が訪れました。5 月に健診を受けたスシュマさんは、「義理の姉の紹介で、私も APC に通うようになりました。今日の健診内容は、体重測定、医師による診察、血液検査でした。処方された薬もその場で受け取ることができ、無料です。通常 1,000 ルピー（約 2,000 円）かかる超音波検査も APC の支援により 200 ルピー（日本円で約 380 円）で受けられるようになりました。このような AMDA からの支援をとても嬉しく思います」と話しました。

毎週水曜日に行うマタニティークラスには APC を利用する妊婦が集います。2024 年 4 月は延べ 74 人が、5 月は延べ 91 人が参加しました。同クラスでは、APC スタッフによる健康教育を行った後、週替わりの軽食（野菜スープ、果物、にんじんプリン、野菜の天ぷらなど）を参加者に提供しています。4・5 月の健康教育では妊娠中の出血、母乳育児、脱水症などを取り上げました。週によっては話題を決めず自由に話せる場としても活用されています。参加したタバッサムさんは、「今回、2 人目の妊娠で APC にお世話になっています。1 人目もこちらでお世話になり男の子を授かりました。1 人目妊娠中は、コロナ禍で感染拡大防止のためのロックダウンが行われていた時期でもありました。当時、APC からご支援いただいた野菜などの食糧はコロナ禍を生きていくのに本当に助かりました。今回いただいたにんじんは AMDA が行っている農業プロジェクトで収穫されたものだと伺いました。いつもありがとうございます」と話しました。

（インド事業担当　岩尾　智子）

インド・ブッダガヤにおける井戸建設

AMDA は 2022 年、インド・ビハール州ブッダガヤで農業事業を始めました。翌年、ビハール州では例年になく遅い 8 月に雨季が始まったため、3 月から 7 月にかけて井戸の水位が下がりました。そのため、それまで使用していた家庭用モーターで農業に使用する水を汲み上げることができなくなり、農作業ができなくなっていました。（株）新通故樋口会長の御令室樋口美恵様より、（株）新通エスピー青山様を通じて、「インドの恵まれない人に水を届けたい」という申し出をいただき、AMDA の活動地で新たな井戸を建設しました。

インドは停電が多いため、モーターを使って水を引き上げられない場合に備えて、ハンドポンプも設置し、停電の間でも水を使えるようにしました。

井戸水は基本的に農作物を育てるために使用しています。敷地内に関係者以外立ち入れないため、敷地外からでも水が欲しい村人が利用できるよう塀の外側に蛇口を取り付け、必要に応じて水を使用できるように対応しました。

井戸建設が完了してから水が豊富に使えるため、野菜、小麦、ダール豆などを育てて食事支援に活用したり、村人に配ったりしていく予定です。

（インド事業担当　アルチャナ　ジョシ）

インド・ビハール州ブッダガヤ：児童生徒へ教科書・制服などを配布

AMDA は２つの現地協力団体が各々運営する学校の生徒に対して、新学期を迎えるにあたり必要な教科書・制服などを提供しました。両校は貧困世帯の子どもを対象としており、授業料はいずれも無料です。

まず、現地協力団体エコラス・デ・ラ・テラ福祉団体が運営する、サラスワティ・シシュ・ニケタン学校に通う生徒計 418 人に最大 6 教科（ヒンディー語、英語、数学、科学、社会、サンスクリット語）の教科書などを提供しました。教科書を受け取ったアマンさんは今年の４月に入学しました。「クラスメートと話していると何度も AMDA のことを聞きました。友達に昨年もらった本やカバンを見せてもらいました。今日は僕ももらいました。とても嬉しいです」と話しました。

さらに、現地協力団体ジーナアミタッブ福祉財団が運営する無償寄宿学校に通う生徒計 150 人に制服と文房具を提供しました。また、各教室に保管している教科書の不足分も寄贈しました。姉と一緒に同財団の寄宿学校に暮らすパワンさんは、エンジニアになる夢に向かって勉強に励むと AMDA への感謝の手紙に綴りました。

（インド事業担当　岩尾　智子）

AMDA 駐日大使館・関係機関お米贈呈

AMDA は、毎年感謝の意を表し、AMDA 海外支部のある国や地域、活動国の駐日大使館・領事館をはじめ協力機関に岡山県真庭郡新庄村で収穫された有機米を贈呈しています。

◆駐日モンゴル大使館 昨年 12 月に着任されたバンズラグチ・バヤルサイハン大使閣下を表敬訪問しました。A. デルゲルマー公使にもご同席いただき、これまでの活動について報告しました。バヤルサイハン大使からは、大統領が提唱するヴィジョン「健康なモンゴル国民」に関する様々な示唆をいただきました。

◆駐日ハンガリー大使館 特命全権大使オルネル＝バーリン・アンナ閣下を表敬訪問しました。同大使館参事官ホッスー・ホルテンズィア様にもご同席いただき、AMDA がハンガリー国内の団体と共にウクライナの避難者支援を行っていることを報告しました。大使閣下の AMDA の活動に対するご感想と洞察は、新たな視点もあり、次の活動の指針となりました。

◆フィリピン総領事館（大阪）　ヴォルテール・デラ・クルズ・マウリシオ総領事は、岡山も管轄されていることから、岡山訪問の機会が度々あり、その際には岡山倉敷フィリピーノサークル関係者とともに交流を深めています。総領事のお人柄とご家族をも含めたその交流は、一層の親近感も増し、その絆が深まっていることを実感しています。

（AMDA 副理事長　難波　妙）

モンゴル大使館

ハンガリー大使館

フィリピン総領事館

ご協力ありがとうございました

2024 年 3 月～ 5 月分（敬称略）

寄付はこちらから

寄付

東日本復興支援 ～ 宮城県南町紫神社前商店街からの報告～

AMDA は、東日本大震災以来、宮城県気仙沼市にある南町紫神社前商店街を継続して支援してきました。復興住宅にお住まいの方、年金暮らしの方も多く、長引く物価高騰と地域のコミュニティの繋がりとなるよう、今年度も引き続き、毎回 100 名の方に食料品をはじめ物資配布を行っています。回を追うごとに並ぶ人が増えており、皆様から「助かります」と声を掛けていただいています。

また商店街では、3 月 11 日、13 年目を迎える 3.11 メモリアルイベントを行い、このイベントで能登半島地震への支援と募金のお願いをしました。さらに震災の風化防止のお話があり、参列の皆様に備蓄食料の大切さを知っていただくように長期保存ができるカレールー等の備蓄セットを配りました。4 月には、東日本震災当時、事務局の坂本さんの大変な様子を見ておられたトランペット・ソリストのノビーさんが是非にという思いでミニライブを開催してくださいました。5 月には、恒例の子ども縁日や子どもビンゴ大会、音楽ステージ、そして震災前より行っていたオールドモーターズミーティングを開催。また旧式バス（ボンネットバス）による内湾地区周遊バスツアーを行い、子どもから大人まで、昔懐かしいバスツアー体験を楽しんでいただきました。コロナが明けて、大勢の人が訪れ商店街も大いに賑わい、子どもたちもコロナ前のように大きな声を出しイベントを楽しんでいました。

（総務担当　太田　浩子）

AMDA 中学高校生会、オープンクラスを開催！

ボランティアグループ AMDA 中学高校生会（以下、中高生会）では、4 月 29 日に、新メンバー歓迎イベント『AMDA 中学高校生会オープンクラス 2024』を開催しました。

中高生会の活動内容や雰囲気を知っていただくことを目的として開催された今回のイベントでは、メンバーによる活動紹介や“防災”に関するプレゼンテーション、参加者と親睦を深めるための自己紹介、「防災食をより良くするには」をテーマにディスカッションを行いました。

当日は高校生 18 人、中高生会メンバー 17 人が参加し、初めて参加した高校生からは、「ネパールやバングラデシュなど国際的な活動に興味を持った」「ディスカッションの際、色々な視点で考えることができて楽しかった」などの声を聞くことができました。中高生会メンバーからは、「自分自身の考えをより深める機会になった」「沢山の方が参加してくださり、会場がとても盛り上がっていたので、楽しく発表することができた」などの感想が寄せられました。

今回のイベントが学校外での交流の場として活用され、考えを深めるきっかけになったことを非常に嬉しく思います。AMDA 中学高校生会は、今後も参加者が自らを成長させるきっかけづくりの場となるよう活動を続けてまいります。

（プロジェクトオフィサー　金高　摩耶）

現在ご寄付受付中の活動

- 能登半島地震
- ウクライナ人道支援
- ハイチ
- カンボジア
- インドピースクリニック
- インド医療支援
- ネパール医療支援
- 東日本大震災
- 内視鏡技術移転
- こども食堂支援
- AMDA 中高生会
- 災害事前対策

台湾・花蓮県地震被災者へのお見舞い

4 月 3 日、台湾東部の花蓮県近海を震源とするマグニチュード 7.7 の大地震が発生しました。この災害に対して、AMDA は発災直後から台湾衛生省（保健省）や AMDA 台湾支部と連携し、日本からの支援派遣を視野に入れて協議を進めていましたが、台湾側の迅速な対応を踏まえ、日本からの派遣は見送ることとなりました。

しかし、これまでの活動を通じて築いてきた台湾との協力関係に基づき、相互扶助の精神の下で、何か力になりたいと台湾側に伝えました。その結果、元台湾医師会会長から台北駐日経済文化代表処を通じた募金が提案されました。これを受けて、4 月 18 日、台北駐日経済文化代表処の政務部部長、傅国華様に被災者へのお見舞いとともに支援金をお渡しいたしました。

傅国華様から、1999 年の台湾地震で 2,400 名以上が犠牲となったことに比べ、今回の同規模の地震で死者数が 18 名に留まった背景には、防災・減災に対する政策と個人の意識の向上と努力があったと伺いました。台湾と日本は、これからもお互いの深い友好関係を基盤に被災経験を共有し、さらなる災害対応に活かしていかなければならないと確認しました。

（AMDA 副理事長　難波　妙）

こども食堂支援プラットフォーム事業、支援物資引き渡し

3 月 7 日、8 日に玄米 30 キロ入り 14 袋、鯖の缶詰 16 箱、カロリーメイト 9 箱を希望する一般社団法人岡山こども食堂支援センターに提供しました。カロリーメイトは、倉敷市内の病院より寄贈していただきました。寄贈先のこども食堂では、鯖缶でサバカレーを提供し、魚の缶詰は子どもでも手軽に食べられ便利と感想がありました。またカロリーメイトは食後のおやつとしてとても喜ばれました。

こども食堂は、その活動の広がりと共に地域の子どもたち、さらにはその地域に暮らす高齢者まで広い年代の人々が集まる地域交流拠点としての役割を担う場所になってきています。集まってきた子どもたちと地域の人がお腹いっぱい食べられたことが幸せに繋がり、笑顔があふれる場所となる一方、社会の中で子ども一人ひとりが必要で大切な存在であると感じられる場所となるように継続していきます。

（財務部長　難波　比加理）

IPU・環太平洋大学との包括連携に関する協定調印式

2024 年 6 月 6 日、岡山市東区の IPU・環太平洋大学にて AMDA と同大学との包括連携に関する協定調印式が行われました。この協定調印は、各々の資源の相互活用を図ることにより、地域社会および国際社会への貢献と人材育成に寄与することを目的としています。具体的には、今後、国内での災害復興支援活動や海外での各種支援活動、地域での防災訓練、災害時の避難所運営のシミュレーションなどで、相互で連携していくことを計画しています。

調印後、同大学の大橋節子学長は、「いまの自分にできることから取り組んでもらいたい。今後 AMDA と密な関係性を築くことで、より深い経験を生徒たちにしてほしい。人のためにできる人、そして、自分を大切にできる人に成長してもらいたい」と述べました。

一方、AMDA の佐藤拓史理事長は、「若さを活かして、学生にはまずは多くのことを経験してもらいたいと思っている。ローカルイニシアティブを大切に、グローバルな教育、人材が揃うこの環太平洋大学とともに、岡山から世界に発信していきたい。そして、『困ったときはお互い様の岡山』と言われるよう活動していきたいと思う」と話しました。

（プロジェクトオフィサー　金高　摩耶）